応用プログラム

アフリカ食文化ワークショップ

～アフリカ食文化の魅力を知ろう～　　北風あみ

南アフリカ共和国からの留学生の食文化紹介

概要

世界で共通する「食べること」を通してアフリカの文化をより身近に感じてもらうプログラム。アフリカからの留学生に自国の食文化を英語で紹介してもらい、疑問に感じたことを質問する対話式ワークショップを開催した。

対象

大学生、教職員、一般の方

目的

- 参加者にアフリカの文化をより身近に感じてもらい、「あのアフリカの留学生の国の力になりたい」という想いを持ったうえで、生協食堂でのTable For Two(対象の日替わりヘルシーメニュー1食分が開発途上国の子どもたちの給食になる仕組み)の対象メニューを食べてくれる学生を増やすため。
- 英語でのプログラム進行及びディスカッションによる語学力の向上
- 自分と異なる文化や価値観を柔軟に受け入れ、多様性を理解し、自分の考え方の幅を広げながら、積極的に人間関係を広げていく力の向上
- 相手の話を丁寧に聴き、質問を工夫して話を引き出す力の向上

実施概要

- 2020年1/15(水)　17:00-18:00　L-cafe　Facebook記事
  - 登壇者　アフリカからの留学生5名(モーリタニア、 ガーナ、南アフリカ共和国、ケニア、マダガスカル)
  - 参加者11名（岡大生、中国、インドネシアからの留学生、通訳の方、国際協力経験のある先生方）

参加者の感想

1) たくさんの人に自国の食文化を伝えられてよかった。(by アフリカの留学生)
2) みんな笑顔でプレゼンターの話を聴いていた。
3) 他の人が文化についてもっと知りたいと思っているのが興味深かった。

企画の経緯

私がこの企画をやりたいと思ったきっかけは、チンパンジー研究に協力してくれたタンザニアの民族への恩返しとしてワトト基金を設立し、長年個人で人道援助をする女性との出会だった。元々、国際協力に関心があった高校生の私は、彼女の「アフリカの地に圧倒された私は彼らに対する尊敬の念を持っている。」という言葉を聞き、今までテレビや教科書で知っただけのアフリカの人たちに対し「貧困だからかわいそう、助けてあげたい」と感じていた自分が恥ずかしくなった。彼女のこの想いを私だけでなく他の学生にも知ってもらいたいと感じ、これを何か実行に移したいと思ったため本プログラムを企画した。

自分が得た学び、自分に起きた変化

「好きなことをやりなさい」これを言われたとき最初は自分が何がやりたいのか分からないと思っていたが、「普段自分が関心があること、好きなことってなんだろう」と考えてみると、「食べること」と「アフリカ」だった。この2つをかけ合わせてみると、世界で共通する「食」を通じると、遠いアフリカの地のことを身近に感じやすい、何より自分が楽しめると思い、アフリカの食べ物へのアンテナを張るようになった。それからは、みんなでつくる財団おかやまの方に紹介してもらった「ウガンダの子どもたちによるワトトコンサート」にアフリカ

の留学生と行ったり、たまたま国際交流イベントで知り合った方がアフリカの留学生と仲の良い通訳の方にアフリカ風カレーを教えてもらったり、「アフリカの食文化を知りたい」という私の声に応えてくれたアフリカの留学生にトマトシチューやタイ米を炊いたもの、チキンなどをごちそうしてもらったりした。この一つ一つの出会いから「全てに意味がある」という考えを改めて大切にしたいと思った。

どんな形の企画をやりたいかばかり考えていたが、「きっかけと目的をしっかりと定めたあとに間を埋めること」の大切さを教えてもらった私は、「本当に自分がやりたいと思うことは何か、何故やりたいのか」を常に考えるようになり、考えすぎてまるで哲学者になったみたいだと感じたこともあった。

「これをやってもいいのかな」と不安に感じることがあったが、「本当にやりたいことをやるんだ」「自分が出来ることからやってみよう」というSiEEDのディレクターや先生、学生スタッフの皆さんの励ましが私の背中を押してくれた。

そして、このプログラムを開催してアフリカの留学生が楽しそうに自分の国の食文化の話をしているのを見たとき「ああ、これって自分のためだけじゃなくて、彼らの喜びにも繋がったのかな」と思った。

今後への期待、計画

今後は、日本でできる開発途上国支援としてTABLE FOR TWOの継承のために協力者を増やし、彼らにアフリカの文化を理解するきっかけづくりをしたい。

2020年中に、Cookpadの世界の料理探検家さんとともに参加者に語学力や創造性、柔軟性を育んでもらうアフリカ食文化ワークショップを計画している。